

翻訳

「ユースタス様¹」
“Master Eustace”
by Henry James

李 春 喜 訳
Lee Haruki

I

お茶を一杯私に手渡ししながら、彼女は自分の分を準備し始めた。それは独身で過ごした女性が持つ正確な手さばきで見ていて楽しかった。

これは私が経験したお話ではなくて、しばらくのあいだ親しくさせていただいた方のお話なの、と彼女は始めた。私はとっても静かな人生を送ってきました。これが唯一私の恋愛物語なのです。しかも、他人の恋愛の物語なのです。私が二二歳のとき、気の毒な母は長く苦しい闘病生活のあと亡くなりました。そして、私は新しく住むところを探さなければなりません。家を探すのは時間とお金のかかる仕事です。私にはそのどちらもありませんでした。そこで、勤め口を求める広告を出したのです。自分の履歴は控えめに書いて、高いお給料よりは働きやすい勤め口を望んだのです。ガーニャー夫人がすぐに私の広告に答えて下さいました。奥様は相当なお給料と静かな生活場所を提供して下さいました。私は、私の乏しい学問の基礎を奥様の男の子に教えて、その他生活の細々したことのお手伝いをするようになったのです。奥様のお声の調子やお振る舞いから二点目の条件を引き受けることには何も難しいことはないように思えましたし、この取り決めを後悔する理由はどこにもありませんでした。私は何よりも自分の自由を大事にしていましたし、それを少しでも失うことはお金には代えられない宝物を手放すような気がしていました。ガーニャー夫人は私の立場をととても心地良いものにしてくれました。私は奥様のことが最初から好きでしたが、私の忠誠心や好意を奥様が本当に理解しておられたのか

どうかは分かりません。私が信頼できる人間だということを奥様はご存知でしたし、いつも私のことを「善良な人」と言って下さっていました。しかし、私が奥様のお手間をとらせないようにしていることや、奥様の華奢でかよわい肩に寄りかからないようにしていることについては、奥様はまったくお気づきにもならなかったのです。奥様のお立場やお人柄には何か興味をそそるようなところがありました。当時奥さまは——実際、奥様は常にそうでしたが——とても魅力的な女性でした。それは美しいというよりは優雅と言った方がぴったりとくる美しさでした。実際にお若いだけではなく、お歳よりもお若く見えました。ほっそりとしてらして、口数は少ないのですが、急がしく動き回っておられ、私が今まで会ったどの女性よりも透明で美しい白い肌をされていました。奥様は私に「影」を取り除いたスケッチ画を思い出させました。奥様には実際、光と同様影もありましたが、それらの影はすべて内側に向かっているようでした。何か光や影といった実体のない物質で奥様はできておられたのかもしれませんが。自然が奥様をお作りになったとき、固くて重い部分や、利己心や野心、主張したり計算したりする能力を忘れてしまったのかもしれませんが。しかし、奥様が背負わなければならないものを経験が与えました。明らかに奥様は悲しみを背負った方でした。奥様はその残酷な重みを右肩から左肩へと置き換え、その重みの下で痛みを感じ、ため息をついておられました。そして、美しい自然な微笑みの奥底で、その重みが奥様の魂から涙を絞り出しているのが分かりました。正直申し上げて、私の目には、ガーニャー夫人のお悩みは奥様を一層美しくしているように見えました。私は恋の話は大好きでございます。私に恋の話が持ち上がるのがない以上、私は周囲の人のお話を大いに楽しむつもりです。奥様に対して私が許さなければならぬようなことがあったとしても、奥様のこの秘密の悲しみはそのいかなる罪をも償って余りあるでしょう。当然、私は始め、奥様のこの悲しみはご主人様がお亡くなりになったことと関係があると思っておりました。しかし、時が経つにつれて、お二人の間にはほとんど愛情というものがなかったのだということを知りました。奥様はご自分の意思に反してご結婚なさ

れたのです。ガーニャー氏は奥様より十五歳も年上で、奥様が率直にお話しになったように、人目とはばからず品のない遊びに耽っておられたのです。奥様の結婚生活は三年しか続かず、明白で大きな安堵感を奥様にもたらして終わりを迎えました。ご主人様はお二人のご結婚生活の間に何か取り返しのつかない過ちを犯されたのでしょうか。私はそう考えています。奥様は花びらをもぎ取られた庭のバラのようでした。ご主人は奥様にほとんど財産を残しませんでした。しかし、残された資産（そのほとんどは奥様のものですが）は、何とか生活に必要なものを賄うには十分でした。お子様と奥様の生活に必要なものといってもそれは極めてシンプルなものでした。奥様はある種のちょっとした贅沢にこだわっておられましたが、生活はひどく単調で質素でしたので、収入のほんの一部しか使われなかったと思います。奥様が私の世話にお任せになったのは、目に入れても痛くないほど大事にされている一人息子、希望の跡継ぎだったのです。彼は五歳で、すでに奥様は文字を教えになっておられ、そのことを大変な偉業だと考えておられたようです。奥様はそのことを大変誇りにされており、まるでそのために奥様がアルファベットを発明したかのようでした。彼女はお子様をユースタスと呼んでおられました。というのも、奥様はお子様にとって最高のものを身につけさせるおつもりだったからです。最高のお召しもの、最高のおもちゃ、そして最高のお名前というように。お子様はお名前と同じようにかわいい方でした。といってもお母様とはまったく違った意味ですが。お母様に似ているところもありましたが、お母様よりはるかに神経質で頑固でした。そして、お母様とは顔立ちやお顔の色も違っていました。ユースタス様に最も欠けていたのはお母様の表情でした。ガーニャー夫人の物腰は、将来の希望によっていくらか緩和されてはいるものの、思いやりのあり憂いに沈んだ苦悩の人のそれでした。希望といってもそれは半ばある種神秘的で宗教的にも見えるものでしたが、宗教とはまったく違うものでした。なぜなら、彼女の夢見る天国はこの地上にあったからです。少年は、幼少の頃から独立した小さな一人の男性のように振る舞っていました。良いことであれ悪いことであれ何かを待つような少年ではなく、ある

物を大胆にさらっていくと思えば、その瞬間また別のものを奪っていくという具合でした。肌の色はくすんでいて青白く、肌の張りも健康とはまったく言えませんでした。頭髪は細く茶色で、踊るようなその動きは不機嫌な彼の頭のわずかな動きを強調しているかのようでした。彼は沈むような、わがままで悪意のある目をしており、彼の目を初めて見たときから、これは容易な仕事ではないと私は感じていました。ユースタス様の頭の回転はととも早く想像力はととも活発だったので、彼の母親が用意した乏しい学習プログラムを何とかやらせることで私は精一杯になってきました。この学習プログラムは甘く、容易にできるように作られていました。奥様が唯一恐れていたのはお子様が勉強し過ぎることだったのです。この気の毒な女性は世の中の男性が知っていなければならないことについて、わずかばかりの考えを持っているにすぎませんでした。私が信じるに、ユースタス様のハンサムなお顔を彼を溺愛する母親さえいけば、あとは夕食のお誘いの返事にユースタスと美しく署名することさえできればそれで十分だと奥様は考えていらしたように思います。今となれば、母親の絶え間ない干渉があったにもかかわらず、よく彼を知的に一人立ちできるようできたものだと思います。後にユースタス様に家庭教師がついたとき、私の忍耐力に対して私はお誉めの言葉をいただきました。

実のところ、私は彼を好ましく思うようになっていたのです。彼の不完全さこそが私を魅了するようになっていたのです。すぐに彼は世間の限界に対して挑戦せねばならなくなりました。そして、彼を甘やかしてくれる二人の女性から世間は成り立っているのではないことにユースタス様はお気づきになるでしょう。彼ほど甘やかすのが難しいお子様はいらっしゃらないでしょう、そして、彼を甘やかすその手が将来に恐ろしい問題をもたらす種を蒔いているのですと私はガーニャー夫人に申し上げました。しかし、奥様にはこの問題について合理的に考える能力、または、明日のために今日を犠牲にするという能力がまったく備わっていませんでした。そして、奥様の愚かさは治療のしようのないものでした。というのも、その愚かさは、むき出しの情熱的な理屈、つまり、愛、愛、純粋な愛こそが母の

義務の要諦であり、何かを諭したり要求したり拒否したりする愛は残酷で邪悪な愛であるというちょっと奇妙で屈折した原理の上にもとづいていたからです。「私のことを愚かで、子どもを育てるにはまったく不向きな女だとあなたが考えていることは分かっています」と奥様は言われました。「しかし、あなたは間違っています。暫って言います。あなたは間違っています。私はとても道理をわきまえていて、とても辛抱強いのです。あなたが考えている以上に私には耐えることができるのです。そして、とても上手く耐えることができるのです。しかし人間は常に気を張っているわけにはいきません。常に強く賢明で善良でいることなどできません。あるときには肩の力を抜いて、みじめで自然な一人の自分に戻らなければならないのです。ユースタスの育て方が間違っているなんてことはあり得ません。そんなことは不可能です、そして、残酷でもあります。あなたはそんなことを口にはいけませんし、ほめかしてもいけません。彼に対しては、私は私の心が命ずるままにします。彼は私にとってすべてなのです。彼は私の慰めなのです。」

私の考えは少し古いのかも知れません。しかし、泣いたからといって月がもらえるわけではないと子供に教えることが古くなることはないでしょう。今やユースタス様は月に対して、つまり、手に入れることができずバカげていて光っているものすべてに対して特別な思いを持っていました。彼の意思は鋼のバネのように鋭く、それを曲げようとか折ろうとしても無駄でした。男の中では自分が一番であるという否定できない確信を、そして、人がよく言うように、もし自分がはるか東の宮廷の王家の一族として生まれてきたとしても、あるいは、長い歴史を持つ専制君主の最後の傍流の病的な子どもだったとしても、これ以上の特権を手にはできなかったらという確信を彼は持っていました。この気の毒な子どもは正義感というものを持ち合わせていませんでした——彼には余分な美德はあったかもしれませんが、人が通常身につけている美德を持ち合わせていなかったのです。もし求められれば、相手に同意したり、許したり、様々なことを認めたりしたかも知れませんが、ユースタス様はほんの少し対立

する権利にも我慢ができなかったのです。ユースタス様は愛すること、しかも情熱的に愛することができましたが、とても嫉妬深く専制的だったので、ユースタス様の愛はそれに値する以上のものを相手に求めるのでした。もしユースタス様が私のことを気に入って、何でも私にお話しになっていたとすれば、それはひたすら私が努力したからです——私はユースタス様の「期待に応えるべく生活をし」なければならなかったのです。馬のように私に馬具をつけたり、何時間もボールを投げたり、シーソーの真ん中あたりに座って私の骨が痛むまで揺さぶったりすることを彼は好みましたが、そういうことをユースタス様は名誉なことだとお考えでした。しかしながら、この率直で子どもじみた傲慢さの中にはほとんど抵抗しがたい魅力がありました。そして愚かにも私はユースタス様に好かれていることが嬉しかったのです。かわいそうな私！二三歳の私は——長いリストの一番始めに来ると私は信じているのですが——、ユースタス様が最初に「征服した者」なのです。ユースタス様は自分に自由が必要なときは独特の方法でそれを用い、自分が賢く聡明でその状況に相当する責任をも果たせることを示されました。ユースタス様はまだ子どもでしたが、すでにある種の個性を持っておられました。彼の才能はすばらしく、彼に何かを教えることは、たとえそれが何であれ、少なくとも退屈なことではありませんでした。もっとも、ユースタス様が気持ち良く専念されたのは本当に必要な事柄と言うよりは、学習するという満足感だったのですが。ユースタス様は音楽に対して素晴らしい耳を持っておられました。本格的に練習したことはありませんでしたが、素晴らしい表現力で曲を奏でることができました。この点についてはユースタス様は生まれながらの音楽家である母親に似ておられました。奥様はいつもピアノの前に座っておられました。勤め始めた頃の奥様を思い出すと、奥様は頭を片側に傾けピアノの前に座り、考えごとをされていましたが、いつも悲しそうに見えました。小さいけれども立派なダイヤモンドがいつも飾られている耳の後ろに三つ編みにした髪をはさみ、両手は思い出せそうにないメロディを求めてぼんやりと音符を追っていました。ユースタス様は物語に飽くことのない興味を

持っておられました。もっとも、ユースタス様は最も冷静で感情を持たない批評家でしたが。私の膝元で、大きな目を私の唇に釘づけにして、私の貧しい想像力が新しいアイデアを求めなければならなくなるまで、不思議な出来事や奇跡をもっともっとと要求するユースタス様を今では思い出すことができます。私は最善を尽くしましたが、彼を感心させることはできませんでした。私が生み出す巨人が満足のいく大きかったことはなく、私の生み出す妖精が十分に小さいことはあり得ませんでした。魔法使い、ドラゴン、地下牢、城もユースタス様の豊かな想像力が必要とするほどの大きなスケールではありませんでした。私はひどく自分の力不足を感じました。ついにユースタス様はひどく生気を欠いた確信とともに、わがままで小さな口を開き私の顔に向かってあくびをするのでした。偶然彼を楽しませたときなど嬉しく思ったものです。というのも、ユースタス様は、早熟な本能でメッキと本物の金とを見分けることができたからです。「ねえ」と彼はよく言ったものです。「君は本当に不器量だねえ。何でそんなに不器量なんだい？鼻はてっぺんのところがひどく大きいし。」(皆さんは不愉快にお思いになる必要はございません。私は不器量でした。しかし、たいていの不器量な女性と同様、時とともに良くなりました。)もちろん、私はユースタス様の無礼をきつく叱ったものでした。しかし、私は秘かに感謝していたのです。なぜなら、それは私に多くのことを教えてくれたからです。もう何のことだったか忘れてしまいましたが、一度私が泣き出してしまうようなことをユースタス様が言ったことがあります。しかし、それは最初で最後の出来事でした。なぜなら、私が泣くことで彼に憐みの心が生まれるどころか、見たところ、涙はさげすみの心とある種の冷笑的で肉体的な嫌悪感を彼にもたらすだけだったからです。ユースタス様に対して優位に立つ最善の方法は無関心と優越心を装うことでした。そうすれば、彼自身が涙に——苦く怒りを含んだ涙に——譲歩するからです。そうすることで、あなたは多分何も得ないでしょうが、失うことも何もないのです。というのも、あなたにはすでに失うものは何もないのですから。

II

もちろん、これらの親密な関係は二年しか続きませんでした。私はユースタス様を私よりもずっと賢くしたのです。背も高くなり少年らしくなり、恐ろしく好奇心の強い子に成長なさいました。私の話すちょっとした物語はいかなる幻想もユースタス様にもたらずことができなくなってしまいました。彼はカーベットにうつぶせになり、小さくてきれいな脚をけり上げては、アラビアン・ナイトやフェアリー・クィーンなど、子ども時代を魅了する主だった物語に何時間も夢中になられました。私は彼を学校へ送りだすべきだとアドバイスしたのですが、彼の母親にとってそれは彼を刑務所へ送れと忠告するようなものだったでしょう。彼は王子として教育されなければなりません。ユースタス様には彼だけの先生がつくのです。競争相手のないユースタス様に仕えなければならぬ次の立派な先生に私は同情を禁じ得ませんでした。しかし、そのような方が容易に見つかったのです。事実、三名以上も見つかりました。三名の家庭教師は連続してやって来ては去って行きました。その三名は規則正しくガーニャー夫人に恋をしました。実際のところ、その三名の恋心に彼女は我慢しなければならなかったのです。しかし不幸なことに、ヴィオラの場合とは違って、彼らは自分たちの恋心を結婚のプロポーズとともに手紙で「披露した」のです。三名の手紙は各々違っていました。しかし、ガーニャー夫人にとっては彼らの手はみな同じだったのです。醜い獣の手に過ぎなかったのです。「何て恐ろしい人たちでしょう」というのが奥様のいつもの見解でした。「どんなことがあっても私はあの人たちと話をしません。ねえ、あなたが話してちょうだい。」そして、自分のことでは断ったことのない私は、このように安っぽい方法で奥様の代わりに断りの意思を伝えるのでした！奥様はお若く——かわいくて、自立していて、孤独でいらしたのですが、少しばかり火遊びをしたからといって評判を落とすようなことにはならないだろうと思われるかもしれませんが。しかし奥様は、男性と火遊びするようなことをご自分には決してお許しにならなかったでしょう。私にとって奥様の

最大の魅力は、奥様がこの種の軽率さを軽蔑し、安っぽい感情のもたらす効果を蔑んでいることでした。それはまるで水晶のように透きとおった最高の泉を飲んだために、淀んだ水にはもう関心を持たなくなってしまったようでした。奥様はご自分に向けられる関心にはまったく無頓着でいらっしやいました。実際、ご自分に関心が向けられると恐怖を感じられるほどでした。個人的な虚栄心の跡など奥様にはまったくありませんでしたし、どなたかの関心を引こうという気などまったくお持ちにならないように見えました。しかし、ご存じのとおり、不幸なことに、ご自分の意思にかかわらず奥様は男性の気を引いてしまうのでした。愛について一連の強力な原理を奥様は持っておられました。そして、この点については常にはっきりと口にされていました。「愛は情熱です。そうでなければ、それは何もないに等しいのです。愛のために喜んですべて——名前、名誉、過去と未来、現世と生まれ変わった後の世界——を犠牲にできるかどうか、それでそれが愛であるかどうか分かるのです。ほんのわずかな優しさや信頼を惜しんだとしたら？それはもう愛ではないのです。あなたはすべてをリスクにさらさなければなりません。そうすることであなたはすべてを手に入れることができるからです——もしあなたが幸せならば。私にはそのような感情を軽く扱う女性が理解できません。彼女らは許されることのない罪について語っています。それこそ許されることのない罪のように私には思われます。言葉の中で私が一番嫌いな言葉をご存じ？——「いちゃつく」です。ああ！この言葉には気分が悪くなるわ。」ガーニャー夫人がこの難解な教義に触れられるとき、集められた記憶の霧によって奥様の透き通った青い目は曇るのでした。この問題に関しては、奥様はご自分を理解されていましたし、奥様のおっしゃることは文字通り本気だったのでした。

奥様は男性から「埋め合わせ」をされることに我慢ができませんでしたので、そのような危険にご自分をさらされることはほとんどありませんでした。そして世間にはほとんど出て行かれませんでした。ご友人に会うのは年に二、三度でしたし、親友と言えるような方はおりませんでした。時が経つにつれて、奥様は誰よりも私を気に入って下さいました。私がユー

スタス様に教えられることが無くなった後も、奥様はどういう立場——家政婦、話し相手、裁縫婦、泊まり客——でもいいから私に留まるよう望まれました。私は自分で自分の条件を決めることができました。そして私はそれらのうちすべてを少しずつ担うことになったのです。私たちのお付き合いがどんどん自由になるにつれて、私は奥様を年下で弱い妹のように思うようになりました。私は、もしそうすることに何らかの意味があるのなら、どんなことについても奥様に最善のアドバイスをしました。しかし奥様の信頼は常にある点で留まってしまふのでした。ちょっとした沈黙のカーテンがいつも私たちの間にありました。時々、そのカーテンはどんどん薄くなっていき、ほとんど透明になり背後にあるものを明かしそうになりました。またあるときは、そのカーテンが動き、私たちのおしゃべりの声ではためき、今にも滑り落ちるか空気の中に溶け込んでしまいそうに思えるときがありました。しかしそれは魔法の織物だったのです。それは惱ましい百もの策略を用い、何年もの間その場所に吊られていました。もちろん、私は巨大な好奇心の発作にかられることがありました。奥様に抱いている私心のない愛情のゆえ、私は奥様の秘密を無理に知ろうとしたり奥様を問い詰めたりすることはなかったという以上のことは言えません。私は「青ひげ」の部屋のドアの近くをうろうろしていましたが、鍵穴から部屋を覗いたことはありませんでした。奥様は秘密を抱えた気の毒な女性なのです。私は秘密も含めてすべて奥様を温かく受け入れました。孤独は自分が選んだことなのだと言われ、奥様は主張されました。そして奥様は、世間がそのようにそっとしておいてくれていることをとても喜んでいるふりをしておられました。ご自分の年月が単調である理由を未亡人であるという事実には担わせて、息子の教育で十分自分の時間は満ち足りているとおっしゃっていました。奥様は未亡人でしたけれどもご自分からは決して夫だった人の名前をおっしゃりませんでした。そして、ほとんど目立たないような喪服を身につけておられました。白をとってもお好みで、奥様が暗い色の衣服を着てらっしゃるのを半年の間で目にするにはほとんどありませんでした。時折、ある決まった日が来ると、とても懇意にしているお店から少し

時代遅れの衣装を購入され、それに身を包み色艶やかに着飾り、家中をバラ色や青色で飾り立てられました。ある日——それはお子様のお誕生日でした——奥様はとても厳粛にされていました。九月の中頃のことでした。このとき奥様は色あせた舞踏用のドレスをお召しになり、宝石や細々とした装身具で過剰に身を飾り立てられ髪を花で飾られました。奥様はユースタス様にも真っ赤なピロードのスーツをお着せになり、この風変わりな装いをされたお二人は大まじめに庭を歩き回り、通りを行ったり来たりされました。時折、奥様は上体をかがめては発作的にユースタス様を抱きしめになりました。ユースタス様自身この祝祭の重要さをお感じになっているようでした。そして、大人びた雰囲気とともにご自分の役割をお務めになりました。夕暮れとともに、まだ髪にウェーブを残し、ピロードのズボンにはしみ一つなく、お洋服のひだ飾りには皺一つない装いでユースタス様はおいでになりました。夜になると庭で御者が花火を打ち上げました。私たちはアイスクリームをごちそうになり、キッチンにシャンパンが贈られました。ユースタス様が跡継ぎらしく振る舞うのも無理はありませんでした！かつて、その親子がお祝い気分散歩をされているとき、近所に住むようになった隣人が二人を追い抜き、恭しく名刺を渡しに馬車で近づいて来たことがありました。彼らは驚いて馬車の窓から親子を見つめ、ガーニャー夫人は在宅ではないと言われました。数日後私たちは、ガーニャー夫人は気がおかしくなって、息子と一緒に自宅の庭園で大変いかがわしい服装をしているという噂を耳にしました。時折、奥様はお誘いを受けたりして、たまにはそれに応じることもありました。外出されるときには、奥様はご自分が喪に服していることを引き立たせ、常にいらいらして帰宅されるのでした。「あんな家には二度と行かないわ。」と、私が奥様のお洋服を脱がせている間、奥様はよくおっしゃいました。「ああいう人たちの怠慢には我慢ができますし、そのことには感謝さえしましょう。でも、ああ神様、私は親切なんか望んでいないのです！助けてなんかいないわ——いないわ、いないわ！そうでしょう、ユースタス？私たちはあなたが成長するのをまっているのよね？そうすればこの哀れな母も助けても

らわなくて済みますものね、そうでしょう？」お子様は絶えず母親のスカートにつきまとい、このような熱の込もった母親の願いの影響力から逃れることはめったにありませんでした。

今までの家庭教師と比べるとあまり情熱家とはいえない教師がとうとう見つかりました。年配で立派な教育のあるドイツ人で、妻は体が大きく感傷的な女性でした。彼は妻の言いなりで、彼女は町で音楽を教えていました。ご主人は温和な辛抱強い方で、ことわざでいうところの「蠟でできた鼻」を持ち、ユースタス様の柔らかい指でそれは形のいい鼻になりました！私には確信して言えるのですが、ユースタス様を教えていた数年の間、ユースタス様を教える以外に彼が得たものは何一つありませんでした。私と同じように、彼も最初はユースタス様に泣かされました。しかし今では、これがまったく勝ち目のないゲームだと分かると、眼鏡を外し、頭を片方にかしげ、青く弱い目で嘆願するように自分の教え子見て、悲しげに「ああ神様！」とあきらめのため息をつくことで満足していました。この教育方針のもとで少年は花が咲くように成長しましたが、それは私の感じでは言わば温室での成長でした。ユースタス様はじっとしていることを好み、ほとんどの時間を家の中で過ごされていました。馬を持っていて一人で長い乗馬に出かけたりしました。しかし、たいていは本を読んでくつろいだり、ピアノをいじったり、うんざりして放り出すに違いない水彩画のスケッチにいらいらしたりして一日を過ごしていました。しかし、ユースタス様には絶えず飽きることなく求めておられた楽しみが一つございました。それはユースタス様の気分が特にいいことの表れで、それが彼を失望させることなどあり得ないと私は思っていました。ユースタス様は頭を後ろに倒し、脚を伸ばして何もない空間（少なくとも私たちにはそう見える）をみつめながら椅子に座って何時間もくつろいでいました。しかしその何もない空間は彼の想像力による静かな騒ぎに満ちており、ユースタス様に様々な場面を提供していたのです。彼を恍惚とさせたこれらの光景の実体は何だったのでしょか？彼がいつの日か手にするであろう広大で幸せな生活、遠くから彼の耳を楽しませるささやきが聞こえる偉大な世界——男としての

成功の喜び——楽しみ、成功、名声——勝ち誇り美化された一種の自負心だったのでしょか。ユースタス様のとりとめのない空想は陰影を持った絵と超越した喜びで群れをなしており、ユースタス様の整った若いお顔と根拠のない不遜な微笑みはその輝きの冷たい照り返しを帯びていました。このような気分浸っているユースタス様をしばらく観察したあと、彼の母親は後ろからこっそり近づき、彼の甘美な幻想をまるでもっと甘い現実と結びつけるかのように彼の額にやさしく口づけするのです。私としてはその二つを引き裂きたかったのですが、少年の人生において、欲望と機会がかくも素早くお互いの術中にはまってしまうのは悲しく気の毒なことだと私は考えました。私はこのゲームの邪魔をし、カードを初めからシャッフルし直し、悪運の味をユースタス様に味あわせたかったのです。母親による無限の譲歩と息子の強烈な傲慢との間で彼らがまるで争いの種を蒔いているかのように私は感じたのです。この青年の暑苦しい夏が永遠に続くはずはありませんでした。そして、気候の変化によって最初に被害を受けるのはこの気の毒な女性であることが私には分かっていました。ユースタス様はいつの日か彼の情熱的な虚栄心の中で変節し、愛という幻惑的なワインで彼の虚栄心を育ててきたこの優しい女性を引き裂くでありましょう。しかし、彼にはもっとひどい天使と同様もっと素晴らしい天使がっていました。この優れた精神（ある種の人間的良心）が悪魔と戦い、傷を負い、翼を傷つけられるにもかかわらず、何度も何度も戦いに戻って来るのを見るのは驚きでした。気前のいい少年っぽい快活さ——若さと利口さの自然な輝き——が私たち女性の心を暖め私たちの最も安心した笑みに火を灯す日がありました。ユースタス様は成長するにつれて、彼の認可を受けた古い友達として私に接して下さいました。私は王子の道化でした——フランス人が言うように、ユースタス様についての真実を私はよく語っていました。ユースタス様にしてみれば聞きたくはないが、私の言うことを聞いてみたい程度には信じておられました。その他のことについては、明らかに、池で鳴いているカエルの鳴き声のように漠然とした遠い出来事のように彼には思えるのです。ユースタス様の母親の気性が持つ永遠の青

い空が、彼のきまぐれな頭をうんざりさせる瞬間があったのだと思います。そういうときには彼は私のところにやって来て、おしゃべりやうわさ話をしたり、不満を述べたり自慢をしたりして、私の小さな仕事机のそばのソファに手足を投げ出し、糸を切ったり、糸車をごちゃ混ぜにしたり、私の様々な道具をちらかしたり、歯に衣着せずに私の仕事を批判したりしました。彼のこういった欠点にもかかわらず、ユースタス様にはある一つの卓越した長所がありました。その長所がなければ、ユースタス様に欠けている美德の半分はその魅力を失うでありましょう。つまり、ユースタス様はすばらしく率直だったのです。ユースタス様にはまったく気取りがありませんでした。織り交ざった彼の気取りを真実の光は透き通し、見事な若い木々が朝日に照らされるように、そしてその光に対してはその執拗さにもかかわらず彼の気取りは和らげられるのでした。ユースタス様はご自分の情熱をととても声高に表現されました。人はユースタス様の報復の知らせを十分受け取ることができました。報復は必ずやって来たのです。彼はそれについて語るわけではありませんでしたが、警告はしていたのです。

III

私が話したこれらの根を詰めた思慮が、もっぱらユースタス様の個人的な幸運の連続に続いたとしても、彼のおしゃべりはまったくこういったことには向けられませんでした。彼の会話はもっぱらユースタス様自身についてのことでした、つまり、彼の野心、彼の悩み、彼の夢、彼の意見、彼の目的についてでございました。ユースタス様はご自分の財産についてよく語られました。ユースタス様は数学をととても嫌がっておられたけれども、小学校を終える前にはご自分が受け取ることになる遺産の量をご理解されておりました。ユースタス様は贅沢に対するととても強い欲求を持っておられました。そして、実際、ユースタス様が美しい物に感心し、生きているものには決して注ぐことのない優しさでそれを使い、大切に保存し、失わな

いようにとっておくとき、もちろん高くつく美德であることは認めますけれど、私にはこれがユースタス様の最も人間らしい特徴の一つのように思えました。そしてユースタス様はご自分の財産を本や絵画や芸術や旅行をすることに使うとお約束されるのでした。そして彼の母親は彼の幻想を尊重することを頻繁に求められるのでした。奥様は常に溺愛する母親の笑みと目の中のわずかな哀愁の輝き——それは奥様のお力なしにユースタス様でさえ認めることができる謎のような可能性へのかすかな証——でもってユースタス様をご覧になられるのでした。奥様はやさしく首をふり、ユースタス様の肩に頭をもたせかけつぶやくのでした。「誰に分かるものですか、誰に分かるものですか！ねえ、ユースタス、私たちの幸せを探ったり予期したりするのは、多分、私たちの不幸を見定めようとするのと同じように愚かなことかもしれないわ。だって、実際それらがやって来たときには分かるのですもの。とにかく、何がやって来ようとも、私たちは一緒にそれに出会うのです。」腕を息子の首に回し、彼の髪に頬を寄せた甘美な接触の中でくつろぎながら、一種の柔らかい恍惚感の中で奥様は目を閉じられるのでした。私は子どもを授かったことがないので母性というものについてはうわさでしか分からないのですが、まるで母性についての秘密を少し知ったような、つまり、母性的な情熱の啓示をガーニャー夫人から得たような気がしました。献身という奥様の完璧な謙虚さは、実際のところ、ありふれた母性愛と言うよりはある深い動機を指しているように私には思えました。それはある種の罪滅ぼし、堅い約束のように見えたのです。奥様はユースタス様に以前なにか間違ったことをされたのだろうか？奥様は何か悪いことが起こるように企てられたのでしょうか？自分の過去あるいは自分の潔白に対する赦免を未来のために手に入れようとしてされているのでしょうか？少年が落ち着いて母親の愛想を、それがまるで彼の唇の間で物憂げに揺れているトルコパイプから発せられる香りの良い煙のように楽しんでいるのを見ると、何かを許すという満足感にユースタス様は浸っているのだと人は思ったかも知れません。実のところ、ユースタス様が口に出さない欲求を私たちが察しないこと、私たちの鈍さ、趣味の悪さ、私たち

の意思と彼のそれとの間に予め確立されているべき調和の欠如など、ユースタス様には私たち全員に許すべきことがおありになるのです。しかし私には、この恐ろしい母親の自己犠牲の溝の淵でユースタス様は眩暈がする瞬間さえあるように思われました。そして、自分を支えるために目の焦点を一瞬定めながら、母親はもう苦しまなくなったのだ、つまり、母親の個人的な野心は深い所で死に絶えたのだという考えにユースタス様は慰めを見出しておられました。彼には遠くでぼんやりと動かずにいる彼女の野心を漠然と見ることができました。振り落とされたこれらの情熱の大胆な亡霊が光の見える方角に登って来ることがないことが望まれました。

手近に不満をもらす要素がないとき、ユースタス様が頻繁に持ち出す不平の源泉は、彼が父親を知らないということでした。ユースタス様は、亡くなったガーニャー氏のイメージを想像されていましたが、そのイメージと本物は残念ながらまったく違っていました。父親が快楽を求めるタイプであったことは知っておられました。そして、彼はそのイメージを理想的な色で描き上げたのでした。快楽を求める男性、何て魅力的な父なんだ。まるでこの種の男たちが子ども部屋に悦びを見出すタイプであるかのようにユースタス様は考えておられました。乗馬、おしゃべり、ゲーム、冒険、どんな楽しみを自分たちは一緒にできただろうか。これ以外にも、人気のないビリヤード部屋（ガーニャー氏が顕著に好んだものの一つでした）の静けさの中で無造作に転がる玉を響かせながら、どれだけ多くの時間を過ごせただろうか。ユースタス様はとても早くから自分の人生を父のそれに似せようとお考えになるようになりました。ユースタス様は父のしたことをするおつもりでした。ユースタス様は父のものだった一ダースばかりのがらくたをご自分の部屋へお運びになり、祭壇の上の遺物のようにそれらをお並べになるのでした。ユースタス様は十七歳のとき、父の名前のイニシャルが丸い部分に彫ってある銀で飾られた古いパイプを吸い始めにられました。パイプを吹かしながら——ユースタス様はおタバコがお嫌いだったので、それはユースタス様の気分をひどく悪くしました——おっしゃりました。「家の中に男の人がいるっていうのは実にいいことに違いない。

この家は恐ろしく女性っぽいやね。お母さんたちとハウフ以外には誰もいないからね。それに、ハウフは年老いた女みたいなもんだから。お母さんはどうしていつもこんな風に生活してきたの？君はどうしたの？世の中のことをまったく知らないんだ。どうして君は顔を赤くしてるの？ここで毎日ぼんやりしているからだよ。顔を赤くすることなんか何もないよ。僕はお母さんに、何に対しても誰に対しても、僕に対してさえ、顔を赤らめて欲しくないんだ。でも言うておくけど、僕はもう我慢ができないんだ。もう十七歳だし、そろそろ社会を見て回っていい頃だ。僕は旅に出ようと思う。お父さんも旅に出たんだ。お父さんはヨーロッパ中を見て回ったんです。小さなフランス語の本が二階にあります。見返しのところに「ヘンリー・ガーニャー、パリにて、1802年」と書かれているパーニーの詩で、それもとてもフランス的なんです。僕はパリに行かなければなりません。大学には行きません。学校には行ったことがないんですから。僕はまったくプライベートな教育を終えたいんです。そんなアメリカ人はほとんどいません。それはとても際立ったことなんです。それに、僕は知りたいことはもうみんな知ってしまいました。ハウフが僕に大学のカリキュラムを見せてくれました。みんなバカげています。彼はそれを笑っていましたよ。僕たちはそれをみんな三年前にやってしまったのです。僕はたいていの若者より本を読んでいます。僕が欲しいのは世の中についての知識なんです。お父さんはそれを持っていました。でもお母さん、あなたにはそれがありません。お父さんは多くのことを経験しています。あの小さなパーニーの版はとても珍しいものだと言っています。僕はそういうものをたくさん家に持って帰って来たいのです。見ていて下さい！」ガーニャー夫人は悲しく困惑し、子どもが対抗意識をこのように吐き出すのを黙ったまま聞いておられました。私は奥様に同情しないわけには参りませんでした。奥様はご主人様が子どもに相応しいお手本にはならないことを知っておられました。しかし奥様は良識をお持ちでしたので、父親の思い出について息子の心に憎しみを感じさせるようなことはできませんでした。奥様は夫を非難するわけでもなければ、息子と一緒にあって讀えるわけでもないあ

の動揺した沈黙に逃げ込まれるのでした。

以前から奥様がそうされていることを私は知っていましたが、この頃奥様にはインドの商社に頼りにされている方がおられました。古いお友だちだと奥様は私に言うておられました。「実際のところ」奥様はつけ加えておっしゃいました。「私の唯一のお友だちなのです——私が大変な恩義を受けている男の方です。」半年に一度この遠方の恩人から奥様宛に外国の消印が押されしっかりと封をされた大きな正方形のお手紙が参りました。私はそれを次の半年について何かアドバイスをされた会報のようなものだと思っておりました。何についてのアドバイスかとお尋ねですか？奥様には関心のある事がほとんどなく、習慣もとってもシンプルなものでしたから、話し合う事柄がほとんどなかったのです。しかし今では、もちろんユースタス様のこれらの計画について適切な助言が束になって送られて参りました。奥様はそれをひどく恐れておられることを私は知っていました。しかしご神託が語られたので、奥様は勇敢な表情をされていました。奥様は確かにとても忠実な信者であられました。この遠方の監督者にどの程度頼っているか奥様はユースタス様にお隠しになっていました。というのも、ユースタス様は、たとえそれがご自身の計画と一致していようと、そのような干渉には憤慨されるに違いないからです。奥様はご友人からのお手紙をいつも隠れてお読みでした。これは奥様の生活の中で唯一ユースタス様と共有されない習慣でした。今、奥様は初めて私に秘密を打ち明けて下さいました。「コープ氏はユースタスに行かせるようとても強く薦められています」と奥様はおっしゃられました。「そうすればユースタスも一人前の男になると彼は言うのです。ユースタスは人に揉まれる必要があると言うのです。少なくとも」といつもの可愛らしい愚かさで泣きながらおっしゃられました。「他の人の害にはならないでしょう！多分、私は本来そうすべきほどには彼を愛していないのだわ。そして、彼を大切に思うようになる少しの間に彼を失うのだわ。もし彼を取り戻すことができたなら！彼を取り戻すことができないなんて何て恐ろしいことでしょう！なぜ私たちはこれほど執拗なためらいと恐れに苛まれるのでしょうか？うんざりするよ

うな人生だわ！」もし奥様が本当に残酷なのはユースタス様の出発ではなくユースタス様の帰宅だにご承知であれば、もっとお話しになっておられたでしょう。

遠い国へ家庭教師としてついて行くにはあの立派なハウフ氏は足元が頼りなく疲れ切っていました。しかし、彼の甥である気だてのよいドイツ人の青年が、書物のことと同じように世間のことをよく知っている者のお手本として、付添い人としてついてくれることになりました。出発する前の一週間、ユースタス様はとても友好的で機嫌がよかったので、私たちはすでに彼のことを思って泣いていました。「母のことは君に任せたまよ」とユースタス様はおっしゃるのです。「もし母に何かのことがあったら君の責任だからね。母は今とても悲しんでいるけど、僕が見えないところに行ったらすぐに元気になるよ。でもお母さん、あまり元気よくし過ぎないでね。僕のことをかたときも忘れないでね。もし僕のことを忘れていたら、僕は絶対許さないから。いなくて寂しいと僕は思われたいんだ。僕がここにいて愛されたってあまり意味がないからね。僕はいないときに愛されたいんだ。」ユースタス様は、出発したあと何週間もの間満足されたでしょう。奥様は近くに埋められた財宝を見守る幽霊のように教会墓地をさまよい歩いておられました。ユースタス様からのお手紙が届き始めると、奥様はそれを十回以上もお読みになり、手にお手紙を握りながら目を閉じて何時間も座っておられました。お手紙は急いで書かれた話にならないほどお粗末なものでしたが、その短さが奥様を喜ばせました。奥様は、息子は上手くやっていて幸せなのだ、年頃の男の子の楽しみの時間からわずかな時間を割いて手紙を書いてくれたのだと考えておられました。ユースタス様が出かけて約三ヶ月が過ぎたある朝、二通の手紙が届きました。一通はユースタス様からで、もう一通はインドからでした。インドからのお手紙はいつもよりかなり早く送られて来ました。ガーニャー夫人はインドからのお手紙を先にお開きになりました。私はお茶を入れながら、お茶沸かし器の後ろから奥様を観察しておりました。お手紙に目を通されているうちに、奥様のお顔はみるみる真っ青になりました。そしてお顔を上げ私と目が合い

ました。奥様のお顔色はすぐに赤く変わりました。奥様は立ち上がられるとユースタス様からのお手紙は開けずにテーブルの上に置いたまま急いで部屋から出ていかれました。このちょっとした出来事は多くのことを物語っており、私の好奇心が刺激されました。そしてその日少し経ってから私の好奇心は一部満たされたのです。奥様は妙に意識したお顔つき——幸せを一種抑圧したようなお顔つき——で私のところに来られました。そしてコープ氏が訪ねてくるのだとおっしゃいました。インドでの仕事から解放され二週間後に彼がお着きになるというのです。奥様は嬉しそうなことは一言もおっしゃいませんでしたが、奥様のお喜びは言葉にできないような種類のものだと私には分かりました。しかし、日が経つにつれて、落ち着きがなく目的を失ったようにそわそわした動きの中に奥様の感情は現われてきました。その感情はあまりにも激しかったので見ているのも痛みしいようでした。鼻歌を歌い、窓から外を眺め、イスやテーブルを動かし、カーテンの皺をのぼし、色あせた様々な物を明るくしようと努力しながら家の中をうろろ歩き回っておられました。鏡の前に来る度に立ち止まって、私がいつも羨ましいと思っていたあのかわいい女性独特の率直な大胆さで、ウェーブのかかったブロンドの髪をたくし上げ、いつもとてもきれいにされているモスリンの皺をのぼしたりしながら、ご自分の様子を気にしていました。しばらくの間、お子様のことはめったに口にされませんでした。ユースタス様の予想はそんなに的外れではなかったのです。このコープ氏という偉大な魔法使いはいったい何者なのでしょう？

答えはすぐに分かりました。彼は予定通り到着しこの家に住み始めたのです。彼を見た瞬間から私は彼のことが気に入るだろうと感じました。彼が私のような身分の者に気を留めて下さったことが嬉しかったのだと思います。私のことはよく聞いていると彼は言いました。私がガーニャー夫人のどんなに良い友人であったか彼は知っていました。そして、彼に対しても私が良い友人であることを強く望んで下さいました。私は、何年にもわたる奥様のお宅での働きが十分に報われたかのように感じました。しかし、この感じの良い出会いにもかかわらず、しばらくの間私はまったく歓迎さ

れていないような感じを受けました。コープ氏は、私が考えていたよりも強い絆で奥様と結ばれていたのです。

私は、懐かしい思い出と過去の時間とにだけお二人を一緒にして差し上げました。そして、私自身は自分の部屋に閉じこもっていました。実際、音のしない話し方で言葉が伝える一種の感傷的な知性がお二人の間にはあることに私は気づいていましたけれども。

ガーニャー夫人に不思議な変化が訪れました。私は奥様を今初めて知るような感じがしたのです。それはまるで、それまで奥様の声を抑え顔立ちを曇らせていたベールをかなぐり捨てたような感じでした。奥様の足取りには新しい決意があり、笑みにはより深い意味がありました。そして、三八歳にして奥様に少女時代が戻って来たのです！奥様はまるで若い花嫁のように顔を赤らめ、取り留めのないおしゃべりをし、悦びそのものに対する愚かなためらいで満たされていました。コープ氏に対しては、時は消し去ることのできない痕跡を残していました。彼は四五歳でしたが十歳以上老けて見えたでしょう。コープ氏は暖かい土地で暮らしたことのある人特有の顔つきをしていました。褐色に焼けた顔色と、動く前に一度考え直すようになったかのようなゆっくりとした足取りを私はいつも好ましく思っていました。背が高くやせておられましたが、以前大男だった人がいくらか「小さくなった」ような印象を与えるとても力強い男性でした。髪は薄く真っ白で、白髪まじりの口ひげをはやしておられました。そして、あの素晴らしい東洋の素材でできたゆったりとした明るい色の衣服を身につけておられました。私は、以前彼に会ったことがあるが、いつ、どこでだったか決して思い出せないような奇妙な印象を持ちました。コープ氏はひどく耳が悪く——とても悪かったので私は声をふりしほらなければなりませんでした。ところが、ガーニャー夫人がコープ氏を見つめながらゆっくり話せば、彼は容易に奥様の言うことを聞きとることができるようでした。コープ氏には特に、盲目の人ほどではないけれども、耳が悪い人が持つあの辛抱強く、訴えかけてくるような雰囲気——耳では聞こえないことも目が見えれば見ることができるとき、より憐れに感じられるあの雰囲気

——をお持ちでした。コープ氏はご自身を自分のよき話し相手にされていました。そして、人が静けさの中のこのあきらめた友情から垣間見たものは、自分もその仲間に入りたいと望むような種類のものでした。しかしコープ氏は、話の主導権はご自分が持たなければならなかったのですが、ご自身以外の人にとっても楽しい話し相手でございました。コープ氏は一種相手をなだめるような明るさで当然の事のように人の反応を受け止め、ちらっと見るだけで相手の意見を押し盛り、それを通常相手が話すよりも上手に言葉にされるのでした。

IV

十年間ガーニャー夫人に私は同情していました。今、奥様のことを羨んでいる自分に何か変な感じがしました。辛抱強く待つことに無駄はないのです。そして、ついに奥様の日がやって来たのです。私は常に奥様の辛抱強さに驚いていました。しかし、結局のところその辛抱強さは秘かな理由で味わいを帯びていたのです。奥様は規律とお手本に従って品行方正に生きてこられたのです。彼のためになら聡明でいることは容易なことでした。私は今「彼の」と言いました。なぜなら、もちろん、今私は、奥様と初めてお会った頃の印象の一つであったあの神秘的な要素と奥様を訪れたこの男性を結びつけることができたからです。コープ氏の存在で私の記憶が戻って来ました。鍵穴に合う鍵を私は見つけたのです。しかし、その箱を開けたとたん、秘密の主な部分は消えてなくなっていることを知って私はがっかりしました。コープ氏が奥様の最初で唯一の愛だったのだと私は確信しました。奥様のご両親はコープ氏を好まず、奥様をふしだらなガーニャー氏と無理やり結婚させたのです——ガーニャー氏が自分の財産を半分すでに使ってしまったっており、妻の財産も同じことになりそうだったので、これは一屈不愉快な事でした。しかし、ある種原始的な良心のためらいを大いに持ち得るほど平凡な人々である奥様のご家族は、ガー

ニャー氏の社会的地位は高く、そのことで彼の欠点は埋め合わせがつくと考えたのです。見捨てられた男性は、するであろう抵抗を彼女がしなかったのだと考えてインドへ旅立ちました。そして半分は悪意を持って半分は絶望して彼女と同じほど悲しく間違った結婚をそこでしたのでした。彼は自分の幸せを軽くあしらい、後悔する人生を送っていたのです。彼の妻も彼の不幸を続けるために生きていました。彼の妻はつい最近亡くなったに違いないと思います。そしてそのことが彼が帰って来るきっかけとなったのです。彼が到着したとき、彼は帽子に喪章をつけていましたが、次の日には無くなっていました。彼らの再会は、情熱による策略や気取りがもはやふさわしくなくなった人生の後半に訪れたのです。しかし、これらの策略や気取りが尽きてしまっても、情熱のいくばくかはまだ残っているのです。そして、それを二人は自由に楽しむことができたのでした。私が気品を感じる抑えた感情で彼らはそれを楽しみ始めていました。これこそが謎に対する私の解釈だったので。正しいかどうかは分かりませんが、少なくとも理屈にはなっていました。

私はユースタス様にお手紙を書くことと約束していました。そしてある日の午後、手紙を書くテーマがあることに喜んで、一人で座りながら彼に長い手紙を送りました。その手紙はコープ氏へのほめ言葉で満たされており、それによって、お母様の具合も良くなったことが分かるような手紙でした。私は、ユースタス様がお持ちになるかもしれない疑いに先手を打ち、今では変化してしまった状況をユースタス様がお受け入れになれることを願っていました。私が手紙を出した後、自分はずいぶん軽率なことをしたように思いました。私は、ユースタス様が大陸旅行という大きな生活の中で、嫉みという例の姦計から免れているかどうか疑問でした。嫉みというのは極めて不適切な感情だったでしょう。というのは、コープ氏の奥様への愛情はユースタス様をも包み込み、奥様に関するすべてのことを含んでいたからです。コープ氏はユースタス様が不在であることを残念に思っておられました。彼のことを語るものにならずすべてのものにこれ以上ない心のこもった関心をコープ氏は示されました。彼はユースタス様の本をめぐり、

スケッチに目を通し、彼の成長の様々な段階で彼を溺愛する母親が彼に描かせた半ダースばかりの肖像画を調べて比較していました。ある蒸し暑い日、自分の教え子に関するニュースを聞いて町からやって来たハウフ氏はコープ氏にわざわざ自己紹介をし握手をしました。ハウフ氏は夕食まで滞在し、コープ氏の提案で私たちは、ユースタス様の健康を祈って縁まで一杯にしたグラスで乾杯しました。もちろんハウフ氏は大げさに涙を流していました。人を泣かすのはユースタス様の使命なのです。私はコープ氏のまぶたにも涙がにじんでいるのを見たように思いました。グラスの中身は一杯で、少し触れればこぼれたでしょう。しかし全体的に見て、コープ氏は再会というこの喜びをハウフ氏よりも静かに受け止めておられました。彼はもの悲しい人物でした。コープ氏には、話の筋よりも人生というこの寓話の教訓により大きな魅力を感じ、運命にはいかなる好意も求めないことを決心した人のような雰囲気がありました。コープ氏が私に会ったとき、彼はほとんど話をせず、やさしく率直な笑みを浮かべておられました。しかし、私はコープ氏のその笑みが大好きでございました。その笑みは多くのことを物語って——ささやいているようでした。「どうか私の好意を受け取って下さい。あなたと私は試練に耐えてきた人間です。私たちはお互いに理解し合えるのです。私たちはピクニックに来ている孤児院の子供たちのように、自分たちの特権的な立場に我を忘れてりしません。私たちは二人とも唯一の意味を人生に与えてくれると思っていたものを得られずに何年間も生きてこなければならなかったのです。私たちは辛い労働の味を知っています。そして、当初手段として用いられた忍耐が、それ自体目的として心地良いものに成長したのです。その忍耐は渴望ということから私たちを解放してくれたのです。」私たちを訪ねて来られた方の笑みはとても聡明に多くのことを物語っていました。私とその笑みに惹かれたのも無理はなかったのです。

コープ氏が訪れて一ヶ月が経ったある夕方、ガーニャー夫人が妙に気まぐずい雰囲気を漂わせて私のところに来られました。「少しお話があるのです」と奥様はおっしゃいました。「あなたをびっくりさせるお話が。あな

たは私をととても年老いた女性だと思いかしら？もう分別がついてもいい年齢だとおっしゃるでしょうね。しかし、私は今日ほど聡明だったことはないのです。私はコープ氏と婚約しました。ああ！最善を尽くして頑張るのです。私には謝らなければならない人は誰もいません」とほとんど挑戦的に奥様はお続けになりました。「これは私たち二人だけのことです。私たちがお互いに気に入っていれば、誰も口出しすることではありません。彼はこの国に留まるつもりです。私たちは常に一緒にとても仲良しなのです。彼が言うように、私は——世間では何と言うのですか——くどかれるほど十分に若いのです。ですから、もちろん、私は結婚するほど十分に若いということです。あなたには何の変わりもありません。あなたには今までとまったく同じように私のそばにいていただきます。結局のところ、私のすることに誰が関心を持つでしょうか？ユースタス以外にはいません。そして、彼はこのような父親ができることで私に感謝するでしょう。ああ、あの子は喜ぶでしょう！」と奥様は我を忘れて両手を握りしめてお泣きになるのです。「あの子が分かっている以上に私はうまく事が運べるのです。私の資産は大変ややこしくなっているように見えるかもしれません。ガーニャー氏がそれをやりたい放題にしてみました。私は彼に腕を縛られて与えられたのです。コープ氏は資産について調べて下さいました。そして彼が言うには、事をきちんとするには時間がかかるだろうということでした。この数年間私はいい加減な代理人の言いなりになって生きてきました。しかし、今私はすべてをコープ氏に任せたのです。彼は悪質な両替商を神殿から追い払ってくれるでしょう。彼と結婚することは小さな報酬なのです。お金のことに関してはユースタスはまったく分かっていません。彼が知っているのはそれをどう使うかということだけです。これからはもうお金のことを考える必要がないのです——コープ氏は私たちに与えられた啓示なのです。心配しなくてかまいません。ユースタスは反対などしないでしょ。それに、ついに彼にも仲間ができるのです——最高で、最も賢明で、最も親切な仲間が。彼がどんなに仲間を欲しがっていたかあなたもご存じでしょう——あの子がどんなに私たちにうんざりしていた

か。新しい生活が始まるのです。ああ、私は幸せな母親になるのだわ——
ついに——ついに！そんなに怖い顔で私を見ないでちょうだい。忘れない
で、私は顔を赤らめている花嫁なのよ。微笑んで、笑って、キスしてちょう
だい。さあ！あなたはとってもいい人だわ。私は今までに贈られたどん
なものよりも気前のいいプレゼントをあの子にあげるのよ。かわいそうな
コープさん——私は彼よりも幸せなんだわ。私にはこれまでずっとあの子
がいましたが、コープ氏には子どもがなかったのです。彼は父親の心を持っ
ています——彼は息子を望んでいたのです。知っていますか？」と奥様は
妙な微笑みを浮かべてお尋ねになりました。「あの人は私のためになるの
と同じように子どものためをも思って私と結婚するのです。とにかく彼は
私と結婚するのです——子どもや他のものすべてと一緒に！」奥様のこの
発言は、自分自身をうまく欺いて純粋な情熱に身を任せたいという努力が
露呈した不自然でせきたてられたような熱意で語られました。しかし奥様
が信じようとしていたほど問題はそんなに単純ではありませんでした。し
かしながら、私はとても嬉しかったですし、純粋な共感の気持ちで奥様に
キスをしました。結婚について考えれば考えるほど、私はこの結婚が気に
入りました。この結婚は、個人的には無能だという心の重荷から私を解放
してくれましたし、ガーニャー夫人の世間体に常につきまっていた一種
の防ぎようのない欠点を強固に補強してくれました。さらに、この結婚は
ユースタス様にとっても好都合なことばかりでした。実際、ご自分に都合
の良いことにユースタス様がほんのわずかしか興味を示されないのは残念
なことです。しかし、父親の思い出への彼の賛美は、より深いところでは
何かより強い権威をユースタス様が必要としていること、そして、何か本
当に尊敬すべきものがあるときは敬意を表すことができるというユースタ
ス様の能力の表れだということを、あえて私は望んでおりました。けれど
も、お子様が同じお気持ちであることを奥様はあまりにも当然視し過ぎて
おられますし、ユースタス様はいつも反対の立場を取られること、そして、
ユースタス様がへそを曲げられる可能性についてある程度考慮しておく必
要があるのではないかと、私は失礼をかえりみず奥様にそれとなくほめ

かしてみました。しかしそれは、私の骨折りのかいもなく下種の勘繰りだと言われました。

「彼を何だと思っているの？」と奥様は叫ばれました。「私はただ二人を会わせるだけでいいのです。ユースタスはデリカシーというものを心得ています。ことわざにもあるでしょう。一を聞いて十を知るです。私には私がしていることが分かっています。」

しかし私は、ご自分が宣言されているほどには奥様はご自分のされていることをご承知でなかったと思います。私は新郎様にささやかなお祝いのお祝辞を申し上げるのが私の務めだと思っていました。私が少し驚いたことに、コープ氏は顔を赤らめました、謝意のこもった短く適切な言葉で答えて下さいました。コープ氏はとても夢中になっていました。結婚式の日取りについてガーニャー夫人は色々な考えを持っておられました。私は当然ユースタス様のお帰りまでお待ちになるものだと思っておりました。しかし、コープ氏がこれ以上日取りを遅らせることには反対だと知って私は少し驚きました。二十年も待っていたのにもかかわらず！まだユースタス様にこのことを知らせていないと奥様は私に言われました——奥様はこれを「サプライズ」にしたかったのです。しかしながら、奥様ご自身がこの「サプライズ」をまったく信じておられないようでした。かわいそうな奥様！奥様ご自身が何となく落ち着かない気分になっておられました。ある晩、私が書斎に入って行くと、コープ氏をご自分の主張を一生懸命されているところでした。初めて彼が興奮しているところを私は見ました。コープ氏は訴えるように私の方を向かれました。「君の言うことならこちらのご婦人も耳を貸すだろう」と彼はおっしゃいました。「私の味方になっておくれ。私たちは世間に対するお世話係ですか？世間は私たちに対してそんなに親切でしたか？私たちは世間を喜ばすために結婚するわけではないのです。なぜ世間体に従って結婚式の段取りを決めなければいけないのか私には分からないのです。ガーニャー夫人は嫁入り道具を買ったり、招待状を送るわけではないのです。実際、これ以上気を遣ったり対面を気にしたりするのはバカげていると思うのです。そういったことは私たちの世代

のものではありません。もちろん、世間に対する配慮が大切なことは分かっています。」彼は微笑みながら続けた。「世間とはとても立派なものだし、しかし、彼らには私から言っておきます。もちろん、私は世間様にも結婚式に出てもらいたい。しかし、そのうちに必ず私が世間様の結婚式に出席することで私たちの結婚式の穴埋めをしますから。」実は、このほんの一時間前、私は自分の手紙に対するユースタス様からの返事を受け取っていたのです。それは短く急いで書かれたものでした。しかし、彼にはそこに次のような言葉を入れる時間はあったのです。「君のコープ氏についての知らせにはまったく感謝しないよ。フランスで言うように、母は僕のことを忘れて自分を慰める機会が欲しいだけなんだ。芝居じみた母親はいつもそうさ。僕はまるでハムレットだ——自分を慰める母親というものには賛成できないな。コープ氏は立派な人だろうさ——そのことはまったく疑っていないよ。しかし、彼には僕が帰る前に訪問を終わらせてもらいたいね。僕たち二人が住むほど家は広くないからね。君に言っとくけど、君は家を出たときより大きくなった僕に会うことになるからね。黒くて濃い口髭をはやしてそれに比例して獐狂になったからね。」私はこの手紙のことについては何も言いませんでした。そして一週間後、奥様とコープ氏のご結婚されたのです。その時のことは私の物語のこの問題とは別に、その年を襲った強烈で圧倒的な暑さのためにいつまでも私の記憶に残るでしょう。結婚式が行われる日までその暑さは数日続いていました。その暑さは夏中続いたように思います。ガーニャー夫人が定期的に出席していた礼拝を司っていた小柄で年配の監督派の牧師——彼は常に彼女に漠然とした偏った支援を与えていた——によって結婚式はとり行われました。年配で独身の牧師の妹は髪を短く切り、自分は「意志が強い」ので結婚式に出席する資格があると行って、予め奥様に出席の打診をしていました。私とこの女性がガーニャー夫人の唯一の立会人でした。結婚式には祝祭的な雰囲気はありませんでした。それはまるで未知の神への厳粛な犠牲的行為のように思われました。ガーニャー夫人は暑さに大変悩まされ、教会を出るとすぐ玄関で気を失ってしまわれました。奥様とコープ氏は昔から知っている海辺で一週

間滞在するご予定でした。奥様が気を取り戻されたので、私たちは奥様を馬車に乗せ、お二人はただちに出発なさいました。もちろん誰もいなくなる家に留まる責任が私にはあり、涼しい風に吹かれるお二人を大変羨ましく思ったのでした。

V

結婚式の翌朝、暗い書齋で一人座っていると、急ぐような足音が玄関から聞こえて来ました。私が最初に思いついたのはもちろん強盗でした——その次にユースタス様だと思いました。彼がすぐに大またで部屋に入って来ました。彼の歩き方、彼の目つき、彼の体の全体が厄介なことになることを予告していました。ユースタス様は見違えるほど変わっておられましたが、すべて良い方向への変化でした。背が高くなり、年齢を重ね、男らしくなっていました。旅行のために日焼けしていて、派手に着飾っておられました。ユースタス様がおっしゃっていた口髭はまだほんの薄いものでしたが、私の目にはそれが恐ろしく妙な風貌を彼に与えているように見えました。ユースタス様は私に挨拶もなさいませんでした。

「母はどこだ？」とユースタス様は叫ばれました。

思わず口から心臓が出て来そうでした。私たちに恐ろしく非があるような調子が彼の声から聞いて取れました。「今日は外出しておられます」と私はお答えしました。「ところで——私は彼の手を取りました——「どちらにお着きになられましたの？」

「ニューヨークだ。サザンプトンから船で来たのだ。これが僕を迎える母のやり方か？」

「でも、ユースタス様が帰って来られるなんて奥様は夢にも思っていられなかったのです。」

「手紙を受け取っていないのかい？ニューヨークから出したんだ。」

「お手紙は届いておりません。奥様は昨日町を出発されました。一週間

のご予定で。」

彼は私を厳しく見つめました。「どうして君は一緒じゃないんだい？」

「私は必要ないのです。奥様は・・・奥様は・・・」私は口ごもってしまいました。

「どうしたのだ——言ってみたまえ！」彼は叫び、足を踏みならしました。「連れがいるんだな。」

「コープ氏がご一緒です」とまだ小さな声で私は言いました。私は自分が動揺してしまったことを恥ずかしく思い、ユースタス様の傲慢な態度に憤りを感じました。しかし、さらに悪い事態になるという考えが私から気力を奪ってしまいました。

「コープ氏——ああ！」と彼は言葉にできないようなアクセントをつけてお答えになりました。まるでコープ氏が通った跡から不愉快な痕跡を拾い出すかのように彼は部屋を見回しました。そして椅子に腰かけながら「何というひどい暑さだ！」と続けられました。「何てひどい気候なんだ、ここは！グラスに一杯水を持って来てくれ。」

私はユースタス様にお渡しして、彼がそれを急いでお飲みになっている間、彼の前に立っておりました。「お気を悪くなさらないでいただきたいのですが、どうして突然帰って来られたのですか」と私は思いきって聞いてみた。

彼はもう一度グラスの上から私を厳しく睨みつけました。「怪しいと思ったんだよ。早すぎたってことはないだろ。母とコープ氏の間になんか起きているのか教えてくれたまえ。」

「ユースタス様」と私は言いました。「私がお答えする前に、たとえどんなことがあろうとも、あなたにはお母様に敬意を表す義務があることを分かっていたいただきたいのです。」

ユースタス様は椅子から飛び上がられました。「敬意だと！やっぱり僕は正しかったんだ。彼らは結婚するつもりなんだ！話してくれたまえ！」私がかためらっていると「話す必要はないよ」と彼は叫びました。「君の顔を見れば分かる。帰って来て良かった！」

ユースタス様の感情の激しさが私の関心を刺激しました。「この件に強引に介入しようとしているのなら、まさに早すぎたってことはありませんわ。遅すぎましたわ。お母様はご結婚なされたのです。」と私は熱心に語りましたが、次の瞬間私は自分の発言を後悔していました。

「結婚した！」と気の毒な少年は叫びました。「結婚した、と君は言ったのか！」彼の顔は真っ青になり、大きく口を開けて私を睨みながら立っていました。そして、両手両足を震わせながら椅子に座り込んでしまいました。運命の裏切りに圧倒され、茫然自失と私を睨みながら、しばらくの間ユースタス様は黙っておいででした。「結婚した」と彼は続けました。「いつ、どこで、どうやって？ 僕のいないところで、僕に知らせもしないで、恥知らずにも！そして、君は今こうして突っ立って僕に話すように、それを黙って見ていたのか！君を友達だと思っていたのに！」と激しく非難しながら彼は叫びました。「母が僕を裏切ったというのに、君に何が期待できるのか？ 結婚したなんて！」と彼は繰り返しました。「悪魔のしわざか？ 僕が離婚させてやる！ いつだ——いつだ——いつだ？」彼は私の腕をつかみました。

「ユースタス様、昨日でございます。お願いですから落ち着いて下さい。」

「落ち着くだと？ これが落ち着けるようなことか？ 母は十分落ち着いていたんだろうさ。息子が帰って来るのを待てなかったのさ！」彼をなだめるために手の上に置いていた私の手を払いのけ、彼は部屋の中で怒りの行進を始めました。「母は一体どうしちゃったんだ？ 気でも違ったのか？ 母を僕のものにしていたものすべて——頭も、心も、思い出も失ってしまったのか？ 君は冗談を言っているんだ——さあ、これは恐ろしい夢なんだ！」ユースタス様は私の目の前で立ち止まり、燃えるような涙を通して私を睨みつけておられました。「このことを秘密にしておくことを母は望んでいたのか？ 母は自分の夫を食器棚にでも隠しておきたかったのか？ 夫だって！ そして僕は——僕は——僕は——母は僕に何をしたのだ？ 僕はこの悪魔のゲームのどこにいるのだ？ 指を切って泣いている小学生のように——最悪の失望のためにここに立って！ 母は僕の人生をだめにしてしまった

——僕の権利を吹き飛ばしてしまったのだ。僕を侮辱し——僕の名譽を汚したのだ。僕はこんな扱いを受ける男なのか？僕はこんなに軽んじられる男なのか？花のように育てられ雑草のように踏みにじられてしまうのだ！真綿に包まれ、そしてさらされるのだ——君は話さなくてもいい——私は気の毒に思い、そうではないのですと諭そうとしていました——「君が話すことは馬鹿げたことばかりだ。何も言うことはないのだ、これ以外に——僕は侮辱されたのだ。分かるかい？」彼は虚栄心が持つ激しい恨みを込めてこの言葉を発した。「最初から分かっていたんだ。こうなると思っていたのだ。コープ氏——コープ氏——いつもコープ氏だ！この結婚は僕の旅行を——僕の愉しみを——イタリアを台無しにしてしまった。君にはこれがどういうことを意味するか分からないだろう。しかし、この結婚が僕の家を台無しにしてしまった以上、それがどうしたというのだ？僕は黙っていたよ——怒りを飲み込んでいたよ。僕は辛抱強かったし、やさしかったし、我慢したよ。そしてこれだ！奴のことなど一言で破滅させてやることだってできたさ！おい、海辺だと？そよ風を楽しみ——波の中でバシャバシャやって——貝を拾っているのだ。素朴で理想的だよ、天国だよ。素晴らしい、何てひどい！母がここにいないのはいいことだ。僕の代わりに話すのはいつも母だからね。そうさ、まぬけ、睨めよ、睨めばいい——嘆けばいいさ！君は怒った男を見ているのだ、怒り狂った男を。でも覚えておきたまえ、君が見ているのは男だということを！彼は男として振る舞うつもりなのだ。」

私はこのすさまじい狂気のほとばしりを止めようとはしましたが無駄でした。ユースタス様は私を押しつけ、部屋から大股で出て行き、二階の自分の部屋へ飛ぶように階段を上がって行かれました。恐ろしい音とともに戸を閉め、鍵をかける音が聞こえました。私はこの最初の爆発でユースタス様の感情が使い果たされていることを望みました。私はその矢面に立つことができ嬉しかったのです。しかし私は、彼の母親に連絡をとることが私の義務だと考え、急いで次のように書きました。「ユースタス様がお帰りです——とても具合を悪くされています。ご帰宅下さい。」私は、これ

を奥様にご滞在の場所に持って行き、奥様に直接手渡すよう御者に指示をして預けました。奥様がこれを受け取られてすぐに出発なされば、今夜遅くにはお着きになるかもしれないと考えたのです。当時はまだ手紙は個人が直接やりとりする時代でした。その間、私はこの気の毒な若者をなだめるために最善を尽くしました。彼の怒りにはほとんど異常とも思えるようなものがありました。狂犬病に違いないとも思えるものでした。これが、彼の母親があてにしていた思いやりのある協力、優しい賛意だったのです。これがあの「サプライズ」なのです！私は何度もユースタス様の部屋のドアに足を運び、優しく話かけ、熱意を込めて祈り、ランチやワインをお薦めし、漠然とした女性らしい慰めを差し出しました。しかし、返って来たのは叫び声と呪いの言葉だけでした。そしてついにはむっつりと黙り込んでしまわれました。その日の遅く、馬に鞍をつけるよう庭師に命令するユースタス様の声が窓から聞こえました。そしてすぐに、ブーツを履き、拍車をつけ、青ざめた顔をしたユースタス様が、ぼさぼさの髪と血走った目をして階段を踏みつけるように降りて来られました。「こんなひどい暑さの中いったいどこへ行かれるのですか？」と私はお尋ねしました。

「馬に乗って散歩に出かけるのだ——散歩だ——熱を冷ますために！」と彼は叫びました。「僕の怒りほど熱いものはない！」そしてすぐにユースタス様は鞍にまたがり門から飛ぶように出て行かれました。私は彼の部屋へ行きました。その異常な散らかり方はどれほど彼が怒り狂っているのかを物語っていました。十以上のものが床に撒き散らかされ壊れていました。古い手紙はもみくちゃにされ引き裂かれていました。見たところユースタス様が母親へのお土産に買ったと思われる真珠のネックレスが、ぼっかりと口を開けた彼の鞆から取り出され、まるでブーツのかかとで踏みつぶされたかのようにカーベットにめり込んでいる光景を見て胸が悪くなりました。ユースタス様のイニシャルが銀で刻まれた二丁の銃がテーブルの上に放り投げられているのを除いて、お父様の遺品には手がつけられておらず、戸棚の上に一列に並べられてありました。私は勇気を出して銃を引き出しに突っ込み鍵をかけました。しかし後に私は一生後悔することになる

のですが、怖くて銃に触ることができませんでした。夕方になり夜になりました。しかし、ユースタス様も奥様もお戻りになりません。私は悲観的な気持ちになり、馬車の音か馬のひづめの音が聞こえて来るのを待ちながらベランダに座っていました。真夜中近くに砂利の上を馬車がガタガタ走る音が聞こえました。ドアのところで奥様がご主人様と一緒に馬車から降りて来られました。奥様は、ある種消えゆくような熱意で私の腕にバタバタと飛び込んで来られました。「彼はどこ？——彼はどんな具合です？」と奥様は叫ばれました。

私はそれに答える苦痛を免れました。というのは、同時にユースタス様の馬がカタカタと囲いの中に入っていき音が聞こえたからです。ユースタス様は馬から急いで降りられ、ベランダから客間に向かって開いている側の窓の一つから家に入って来られました。その部屋ではランプが灯されていました。私は奥様とご主人様をお通しました。ユースタス様は窓の囲いを越えて部屋に入っておられました。ランプの光がユースタス様を照らし、彼の姿が暗間に浮かび上がっていました。母親は悲鳴とともに彼に倒れかかりましたが、一瞬の後、さらに深い叫び声とともに自分の手を胸に押しつけて立ち止まられました。ユースタス様は片手を振り上げ、あらゆる心的な力が込められたしぐさで母親を払いのけました。「ああ、私の息子、私の息子よ！」と哀れみを誘うようなうめき声とともに、奥様は激しくとまどいながら私たちを見回し叫びました。

「僕はあなたの息子ではない！」と激しい感情のために半分押し殺したような声でユースタス様はおっしゃいました。「僕はあなたをあきらめました。あなたは僕の母親ではありません！僕に触るな！あなたは僕をだまし——裏切り——僕の名誉を汚したのだ！」気が触れたようなこの忌むしい言葉の叫びの中にも明らかな虚栄心の響きを聞き取ることができました。

私はコープ氏を見ました——彼はひどく真つ青でした。コープ氏は少年のしぐさを目にしていましたが、彼の言葉を聞き取ることができませんでした。一番近くの椅子に腰かけ、何かを探るように少年を見ていました。気の毒な奥様を安心させるために私は駆け寄りました。奥様は恐ろしい寒

さのために突然身震いに襲われたようでした。奥様は両手を握りしめ何とか声を出そうとしておられました。「ユースタス——私の息子——私のい
 としい——私の——あなたは自分の言っていることが分かっているの？聞
 いてちょうだい、聞くのよ、ユースタス。皆なあなたのためなのよ。私を
 もっと愛してくれなければいけません。私はできる限りのことをしたので
 す。急いでいたかもしれませんが。しかしあなたのために——あなたのため
 に急いだのよ——」奥様から力が抜けていき奥様は突然泣き出されました。
 「彼は私を憎んでいるのだわ——彼は私を否定しているのだわ！」と奥様
 は叫ばれました。「彼は私を殺してしまったわ！」

「泣け、泣くがいい！」ユースタス様は鋭く言い返されました。「僕が泣
 いたように！だが、これまで以上に偽ることはやめてくれ。あなたは待つ
 ことさえできなかったのに！それで僕の幸せについて軽々しく語るのか！
 僕の幸せは壊れた家に——疑いを持った心に——卑劣な血のつながらない
 父親にあるのだ！あなたは明白に彼を選んだのだ！目が飛び出るまで泣く
 がいい——あなたは僕の母親ではない。」

「あの子は私を殺す気だわ——あの子は私を殺す気だわ」と彼の母親は
 うめいた。「ああ神様、彼を殺すと私が言うことさえできたら！」奥様は
 夫の方を向いて叫ばれました。「彼のところに行って——彼のところに行っ
 て！彼は病気なのよ。気が触れているのだわ——自分の言っていることが
 分かっていないのよ。この暑さのせいだわ」と奥様はとりとめなく続けて
 おられました。「あの子を抱いてやって！ユースタス、ユースタス、しっ
 かりして！」

気の毒なコープ氏は大粒の汗が吹き出している額にハンカチをあてなが
 ら立ち上がっておられました。半分懇願するような目をユースタスに向け
 て、ゆっくりと彼の方に歩いて行かれました。ユースタス様は挑戦するよ
 うにコープ氏を頭から足まで睨みつけ、最も親切で賢明で確固たる方法で、
 そういうものとして彼に差し出された友情に敵意を表しました。そして乱
 暴に彼の手を払いのけながら「偽善者め！聞こえたか？」とコープ氏の顔
 の近くで怒鳴ると部屋からさっさと出て行かれました。コープ氏は悲劇的

な意味の言葉を発して首を振り、一瞬、悲しみにあふれた長い目くばせを妻と交わしました。奥様は激しく泣きじゃくりながらご主人の首に倒れ込まれました。しかしすぐに落ち着きを取り戻されると、「彼のところに行ってちょうだい」と繰り返されました。「彼を追ってちょうだい。何も隠さずすべてを話してちょうだい。もう私には関係ありません。私はもう痛みを受けました。」

VI

私は奥様がお部屋に上がられるのに手を貸していました。奥様の体からは完全に力が抜けて、お洋服を途中までお脱ぎになっただけでベッドに横になってしまわれました。奥様はたいへん強烈な興奮状態の中におられ、お体のすべての神経が震え揺れ動いていました。そして胸が痛むような支離滅裂なひとり事をつぶやき続けておられました。「もう何も私を傷つけることはできないわ。私は救われる必要などないのです。何ものも私の名誉を汚すことも讃えることもできないわ。私はもう自分への一撃を受けたのです。それは私のせいだわ——すべて、すべて、すべて！私は愚かなことの上に愚かなことを、弱さの上に弱さを積み重ねたのです。私の心は張り裂けました。もう何の役にも立たないでしょう。ねえ、あなたは正しかったわ——私は彼を墮落させてしまったわ。私は彼に人の襲い方を教えたのだわ。ああ、何という仕打ちでしょう！彼は非情——非情だわ。残酷だわ。彼は虚栄心と利己心で目が見えなくなっているのよ。もう今となってはそんなことはどうでもいいわ。私は苦しむために生きるつもりはありません。もう充分に苦しみました。ねえ、私は死にます、死にます。」

この壊れた緊張状態の中で、奥様は悲しみの辛さを激しく吐き出されました。私は奥様をなだめ慰めようと手の限りを尽くしました。しかし私は、優しい性格の最も傷つきやすい所に取り返しにつかない傷を奥様が負われていることを感じました。「もう生きていたくないわ。」奥様はつぶやかれ

ました。「私はあまりにも恐ろしいものを見てしまいました。それは絶対に癒されないでしょう。もう二度と私たちは以前のようにはなれないのです。彼は正体を現したのです——あれが彼の正体ではないですか？恐ろしい！」

落ち着きを取り戻していただくとする私の努力にもかかわらず、奥様はさらに興奮されたというよりは——というのは奥様から力が抜けていき、声は低かったので——さらに痛々しく支離滅裂にしゃべり続けることになってしまいました。しかしながら、奥様の苦しそうなつぶやきから、私はわずかな意味を掻き集めました。奥様はどこか究極の告白をなさりたいご様子でした。私は奥様の手を自分の手に包み、ベッドの端に腰かけました。時折、奥様の大きなささやき声を越えて、二人の男性の声が聞こえて来ました。奥様のお部屋の隣は大きな化粧室で、その化粧室の向こう側がユースタス様のお部屋でした。この三つの部屋は覆いのない長いバルコニーに面していました。

コープ氏はこの青年の部屋まで彼を追って行き、低い落ち着いた声で彼に話しかけていました。ユースタス様は黙っているようでした。しかし、不自然な返答のこの欠如の中に何か恐ろしい不吉なものを私の耳は聞き取っていました。

「ねえ、この何年もの間、あなたは私のことをどう思ってたの？」と奥様はお尋ねになりました。「あなたの目には私は他の女性と同じように映っていたのかしら？私はそうであるよう頑張っていたのですが——しかしあなたは見てしまいました——見てしまいました！言わせてちょうだい。あなたが私を軽蔑しようともうどうでもいいわ——私がそれを知ることはありませんからね。これが私の最後の言葉です。簡単に話してしましましょう。」

しかし、それらの言葉は奥様が望まれたほど簡単な言葉ではありませんでした。奥様は記憶の薄暗い荒野の中でご自分を見失われたようでした。奥様の体の働きはさまよい、よろめき、つまりいていました。私が真実を探り当てたのは奥様の言葉からではなくて——言葉は曖昧でした——奥様

の沈黙といわば私自身の急かされた同情の反響からでした。それは強烈ではっきりとした輪郭のもとに現れ、明るく長い光で過去を照らし、赤く染まった光で現在を照らすのでした。私の疑いが実を結ぶのにこんなに長い時間がかかったことが今となっては奇妙に思えました。しかし私たちの想像力は常にあまりにも臆病なのです。今すべてのことがはっきりとしました！この無情な光の中で、私の目の前で究極の失望感にあえいで横たわっている気の毒な女性に対して私はいささかの侮蔑の念も感じなかったことを神に誓って申し上げます。

宿命による哀れな犠牲者——もし私に彼らを承服させることさえできたら！しかしながら、しばらくの間、母親であり妻であるこの不幸な女性は私のすべての関心を要求していました。私は奥様から立ち去り、ご主人様に戻っていただくつもりでバルコニーを歩いていました。ユースタス様のお部屋の光がユースタス様とご主人様を照らしていました。お二人は向き合って座っておられ、一瞬黙っておられました。コープ氏は、とまどい、怒り、絶望して、まるでご自身の最後の切り札を出すかのように両手を膝の上に置き、カーベットの隅を覗みつけ、歯をかみしめておられました。ユースタス様は恐ろしく悪意のこもった表情でご主人様を激しく見つめておられました。その表情のために私の胸は悪くなりました。私はもう少しで部屋の中に飛び込み、何とかしてお二人を引き離そうとすることでした。ちょうどそのとき、コープ氏は突然視線を上げ、ユースタス様の心そのものを讀んだかのような目くばせをユースタス様と交わされました。ご主人様はもう十分我慢したとおっしゃるかのように手を虚空に振りかざされました。

「僕が君を見ているようにもし君が自分自身を見たら」とご主人様はおっしゃいました。「君は大変驚くだろう。君は自分のバカげた姿を知ることになるのだ。君は若い、傲慢と思い上がりのために墮落しているのだ。君には男として自分を誇りにする理由は何もないのだと私が言ったら君は何と答えるかね？そこの君の馬丁の方が自分を誇る理由をもっとたくさん持ってるよ。君の虚栄心には穴が空いていて、君の盾には染みがついてい

のさ！君のために僕は仕方なく強引な手段に出ざるを得ないのだ。その怪物じみた君のうぬぼれにもかかわらず、君がどういう者であるか教えてやろう。君は——」

私はご主人様が何をおっしゃるのか承知していましたが、それを聞く勇氣はありませんでした。私が急いでコープ夫人のもとに戻ると同時に、響きわたるような言葉が私の耳に襲いかかって来ました。その後、とりとめのない大きな叫び声と乱闘の音がしばらく続き、そして銃声が響きわたりました。銃声はガラスが壊れる音で消されてしまいました。コープ夫人はベッドの中でまっすぐに起き上がり鋭く大きな声で叫ばれました。「あの子は彼を殺して——私も殺したのです！」私は腕の中で奥様を抱きかかえました。そして奥様は息を引き取られました。私は奥様を優しくベッドに寝かせて、バルコニーを通して震える脚でユースタス様の部屋に向かいました。最初の一瞥で私は安心しました。どちらの男性も目に見えては傷ついておらず、銃は煙を吐きながら床の上に転がっていました。コープ氏の指の間から燃えるように赤い彼の顔が見えました。

「殺人ではない」と私が窓枠をくぐったときコープ氏は言いました。「間一髪のところまで自殺を食い止めたのだ。致命的だったのはその鏡だけだ。」鏡は粉々になっていました。

「これは殺人です」と私はユースタス様の腕をつかんで彼を立たせながら答えました。「あなたはご自身の母親を殺したのです。そしてあなたの父親はこの方です！」

私の友人は一瞬黙って、まるで物語の効果を誇るかのように、意気揚々と私の方を見た。もちろん私は半時間前に結末を予想していた。「何て陰気な物語なの！」と私は言いました。「でも面白いわ。もちろんコープ夫人は元気を取り戻すでしょう。」

彼女は一瞬黙っていました。「あなたも私と同じなのね」と彼女は答えました。「臆病な想像力だわ。」

「正直に言うけど」と再び私は言った。「ユースタスをどう処理するのか

ちょっと困っているのよ。この二人がどうやったら上手く仲直りができるのか——あるいはできないのか分からないのよ。」

「二人は一度だけ仲直りするのよ——でも一度だけだわ。彼らはそれぞれの形で何年ものあいだ孤独に過ごすのよ。二人が和解することは決してないわ。二人の間の溝はあまりにも深すぎたのよ。そこに埋められている気の毒な女性でさえその溝を埋める役には立たなかったのよ。しかし息子は許されるの——でも父親が許されることはないのよ！」

あとがきにかえて

1

大変乱暴な言い方をすると、物語には大きく分けて二種類あるといえる。一つは、登場人物を取り巻く状況に変化が起こり物語の始めとは違った状況が生まれ、物語の始めとは違った認識が登場人物が得るに至るというものである。つまり、物語の中心は出来事ではなく、登場人物の認識の変化にある物語である（その結果それは当然同じような認識の変化を読者にもたらす）。

もう一つは、出来事やプロットが中心で、物語の冒頭で提供された謎が物語の最後に解けたりあるいは解けなかったり、物語の始めで登場人物が抱えてしまった問題が解決したりしなかったりというように、登場人物（読者）の認識の変化というよりはむしろ、次に何が起こるのかといった物語の出来事やプロットの楽しさが中心であるような物語である。

Seymour Chatman は前者のタイプの物語を“revealed plot”と呼び、後者を“resolved plot”と呼んで、それぞれ次のように定義している。

In the traditional narrative of resolution, there is a sense of problem solving...of a kind of ratiocinative or emotional teleology...“What will happen?” is the basic question. In the modern plot of revelation,

however, the emphasis is elsewhere, the function of the discourse is not to answer that question or even to pose it...It is not that events are resolved (happily or tragically) but rather that a state of affairs is revealed. Thus a strong sense of temporal order is more significant in resolved than in revealed plots... Revelatory plots tend to be strongly character-oriented, concerned with the infinite detailing of existents, as events are reduced to a relatively minor, illustrative role. (*Story and Discourse* 48)

ここで、Roland Barthes による有名な物語の解説コードを用いるなら、“revealed plot”とは semic code が支配的な物語で、“resolved plot”とは hermeneutic code が支配的な物語だと言えるだろう。Mireille Ribi re は *Barthes: A Beginner's Guide* の中で Barthes の semic code について次のように述べている。

[The semic code] whose name is derived from *sema*, the Greek word for sign, and is related to ‘sememe,’ the linguistic term for a basic unit of meaning. The semic code relies on connotation. It is notably the code that enables the reader to take in various details relating to the protagonists of the story and to interpret and combine them to gradually build up an over all view of the character. (46)

また、Terence Hawkes の説明を引用すれば Barthes の hermeneutic code について彼は次のように述べている。

This is really the ‘story-telling’ code, by means of which the narrative raises questions, creates suspense and mystery, before resolving these as it proceeds along its course. (*Structuralism and Semiotics* 116)

さらに、Tzvetan Todorov は *Genres in Discourse* 所収の “The Two Principles of Narrative” の中で、semic code が支配的な物語を “gnoseological”, hermeneutic code が支配的な物語を “mythological” と名づけそれぞれ次のように説明している。

On the one hand we have narratives in which the logic of succession

and transformations of the first type are combined ; [The first case involved a modification carried out on a basic predicate; the predicate was taken in its positive or negative form, modalized or unmodalized].… On the other hand, we have the type of narrative in which the logic of succession is supported by the second sort of transformation, narratives in which the event itself is less important than our perception of it, and degree of knowledge we have of it: (31)

こららの引用 が端的に示しているように、“revealed plot”とは出来事の重要性よりも、その出来事に対する登場人物あるいは読者の認識または登場人物や読者がそれについて所有している知識の程度の重要性の方がまさるような物語であり、“resolved plot”とは、トドロフの言い方を借りれば、「第一のタイプのような変形」、すなわち、基本となる物語の述部に肯定的あるいは否定的なかたちの modality が加えられあるいは加えられないかたちでもたらされた修正に「継起の論理」が組み合わされた物語である。²

2

これまで、Henry James の研究においては、「何が」書かれているかということよりもむしろ「いかに」書かれているかということに焦点が当てられてきた。つまり、James は “resolved plot” の作家ではなく “revealed plot” の作家だというわけである。

もちろん、そのような知見が見当違いなわけではなく、James を小説の方法的な面に意識的な作家であった考えることは批評的な立場からはむしろ James に対する正当な評価であると思われる。したがって、技巧的な作品が言及されることの多い James 研究において、彼の若い頃の作品が取り上げられることは当然そう多くはない。しかし、今回ここに訳出した “Master Eustace” は彼が 28 歳のときに発表した作品である。この作品は、物語の途中ずっと秘密にされてきたある謎が物語の最後に暗示的に明かされるというミステリーの要素を帯びた楽しく読めるお話に仕上がっている。

これまで日本語に翻訳されてきた James 作品の多くが難解で技巧的な作品であったことは James が 20 世紀的小説の先駆者であったことを考えると当然のことであった。なぜなら、まさしく、19 世紀から 20 世紀的という世紀の変わり目は、芸術の表現様式に大きな変化を要求した時代であったからである。そのような世紀の変わり目に生きた小説家として、James が小説の方法的な面に意識的にならざるを得なかったことはある意味では歴史の必然であったかもしれない。

しかし、20 世紀は去り 21 世紀も 10 年が過ぎようとしている現在、これまであまり省みられることのなかった James の物語作家としての一面にもう一度光を当てることもあながち意味のないことではないだろう。新しい世紀の始めにおいて、新たな観点から James の作品を考えるという意味においても、ここに初期の James 作品を訳出することは大変意義のあることだと考える。

なお、著作権に関しては、Henry James の没後 92 年が経過しており、彼の作品はすべてすでにパブリック・ドメインである。したがって、James の作品の日本語への翻訳には著作権上の問題は発生しないと考える。

Notes

- 1 訳本の底本には、Henry James, "Master Eustace," *The Complete Tales of Henry James*, vol. 2, ed. with Introduction by Leon Edel (London: Hart-Davis, 1964) 341-73 を用いたことをお断りしておく。
- 2 詳しくは Todorov の *Genres in Discourse* に所収されている "The Two Principles of Narrative" を参照。

Bibliography

- Chatman, Seymour. *Story and Discourse*. New York: Cornell University Press, 1978.
- Hawkes, Terence. *Structuralism and Semiotics*. Berkley, University of California Press, 1977.
- Mireille, Ribiere. *Barthes*. London: Hodder & Stoughton, 2002.
- Todorov, Tzvetan. "The Two Principles of Narrative." *Genres in Discourse*. Trans. Catherine Porter. Cambridge: Cambridge University Press, 1990. 27-38.